

今月号の和洋女子大学との連携企画は、社会保障・社会福祉が専門の岸田宏司先生からお話をいただきました。神話の話、や障害者福祉を切り開いた第一人者である糸賀一雄さんの言葉などから「なぜ社会保障や社会福祉が必要なのだろう？」と、考えるきっかけになるようなお話です。



私たちは普段、「支える側」と「支えられる側」を分けて考えがちです。介護や障害福祉でも、「助ける人」と「助けられる人」という見方が当たり前のようになっています。しかし、本当にそうなのでしょうか。私は、むしろ弱い立場にある人たちがこそ、社会を人間らしく支えているのではないかと感じています。

日本では高齢化が進み、介護保険制度の給付費は11兆円を超えました。そのため、「社会保障の負担が重い」という声も聞かれます。しかし、これは単なる負担ではなく、「誰も見捨てない社会をつくろうとした結果」だと思います。人は誰でも老い、病気になり、支えを必要とするからです。弱さは特別な人だけの問題ではなく、人間にとって自然な姿です。

ユダヤの伝承には、「世界には36人の隠れた義人（人知れず善を行う人）がいて、その人たちがいるから世界は滅びない」という「足萎えウーフニック」の物語があります。彼らは英雄ではなく、無名の普通の人々です。この話は、「弱い存在こそが社会を支えている」という逆転した視点です。その存在によって、周囲の人が優しさや思いやりを学び、人間らしさを保っているのです。



経済学者のアマルティア・センは、人間には「幅」があり、誰もが支える側にも支えられる側にもなると語りました。哲学者のジョン・ロールズは、自分が弱い立場になるかもしれないと考えれば、人は安心して暮らせる社会を選ぶはずだと論じています。また、思想家のピョートル・クロポトキンは、「助け合う種ほど生き残る」と述べました。

福祉の現場では、認知症の高齢者が配膳を手伝い、障害のある方が周囲を和ませる場面が数多くあります。支援されるだけでなく、その人自身が周囲を支えているのです。そこには、効率や生産性では測れない、人と人とのつながりがあります。誰かの弱さに触れることで、相手を思いやることを学びます。

福祉実践家の糸賀一雄は、「この子たちを世の光に」という言葉を残しました。支援が必要な人を守るだけでなく、その存在そのものが社会を照らしている、という意味です。社会福祉とは、弱い人を特別扱いすることではありません。誰もが弱くなる可能性を持つ社会の中で、お互いを支え合いながら生きていくことです。弱さを排除する社会ではなく、弱さを包む社会こそ、本当に強い社会なのだと思います。